

〔資料〕

岐阜県保健婦養成所1期生の養成所での体験

松下 光子¹⁾ 坪内 美奈¹⁾ 大川 眞智子²⁾

Experiences of the First Students in the Gifu Training School of Public Health Nurses

Mitsuko Matsushita¹⁾, Mina Tsubouchi¹⁾, and Machiko Ohkawa²⁾

I. 目的

筆者たちは、学生実習でお世話になった保健師の話から、第二次世界大戦の末期に岐阜県内で保健婦養成所が設けられていたことを知った。そのことをきっかけに、岐阜県における保健師養成、保健師活動の経緯について情報収集を始めた。そして、昭和20年に岐阜県立として初めて設けられた保健婦養成所の1期生の方たち、さらに、保健婦教員の方と知り合うことができた。

我が国において保健師の資格要件が明確になったのは、昭和16年(1941年)の保健婦規則制定によってである。大正末期から昭和初期、貧困や社会不安が広がる中、社会事業や公衆衛生事業の中で始まった保健師の活動は、その後、国を挙げて戦争に向かう社会の流れの中で健民健兵育成のために国民の健康管理を担うものとして期待されるようになった¹⁾。岐阜県では、昭和19年当時、無医村が140余あり、農村での住民の健康管理は大きな課題であった²⁾。そして、昭和19年に女子医専、20年に保健婦養成所を開設している。男性は兵隊へ行くため、残った女性に期待しての対策と考えられる。

そのような時代の中で保健婦となっていった1期生の方たちは、養成所でどのような教育を受け、何を感じ、考えていたのか、また、その後の活躍が現在の保健師活動にどのように影響を及ぼしているのか、岐阜県内の保健師養成、保健師活動の初期の歴史として、保健婦養成所1期生の方たちの体験を記録に残したいと考え、聞き取り作業を行ってきた。

本稿では、昭和20年に岐阜県がはじめて県立で設立

した保健婦養成所1期生の方たちと養成所で教員をしていた保健婦の方の体験記録として、終戦前後の混乱期にあった養成所での体験に関する情報を整理する。保健婦規則による養成所教育に関するものの多くは、他県においても、戦災で失われ、残されているものは卒業生の記念写真や証言のみという現状があり³⁾、記録として残す意義は大きいと思われる。

なお、平成13年の保健師助産師看護師法の改正により保健婦から保健師に名称が改正された。本稿では、固有名詞や当時の名称を用いたほうが適切と考えた場合、当時の状況を記述している場合は、保健婦もしくは看護婦と表記している。

II. 方法

1. 既存資料からの情報収集

昭和55年に日本看護協会保健婦部会岐阜県支部が発行した岐阜県保健婦活動の記録である「あゆみ」⁴⁾から岐阜県内における保健師教育の歴史を把握した。

2. 養成所1期生および保健婦教員からの情報収集

1) 同窓会での情報収集

養成所時代の記憶は、相互に会話することで思い出しやすいのではないかと考え、1期生の方たちの同窓会に参加した。当時の品物や写真で手元に残っているものを持参することを依頼し、それらも見ながら、養成所での体験について話を聞いた。養成所時代の話題を提示した部分のみについて、参加者の了解を得て、テープ録音を行い、録音内容を記述記録に作成した。連絡がついた1

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

期生 22 名（第一種生 16 名、第二種生 3 名、不明 3 名）のうち 11 名（第一種生 9 名、第二種生 1 名、不明 1 名）と保健婦教員 1 名が参加した。

2) 郵送での情報収集

同窓会不参加の方からの情報と同窓会で話しかれなかったことを捉えるために、同窓会終了後に、当時の思い出について自由記載する郵送調査を行った。対象は、同窓会の郵送案内を行った 1 期生 21 名と保健婦教員 1 名であり、当時の状況について何らかの記載のある返信があったのは 1 期生のうち 4 名（第一種生 3 名、第二種生 1 名）であった。

3) 聞き取り調査

1 期生および保健婦教員の方で了解が得られた方に、養成所時代の体験、卒業後の経緯、印象に残っていることについて個別面接または、電話にて聞き取り調査を行った。面接の場合、聞き取り内容は、了解を得てテープ録音を行い、録音内容を記述記録にした。電話の場合

合は、電話中のメモをもとに、終了直後に聞き取った内容の記録を作成した。連絡のついた 1 期生 20 名のうち 10 名（第一種生 8 名、第二種生 2 名）と保健婦教員 1 名から聞き取りと調査データにすることについて了解が得られた。

3. 分析方法

1) 岐阜県における保健師養成の歴史を既存資料に基づいて整理した。

2) 既存資料、養成所 1 期生および保健婦教員から得た情報の記録の中から、養成所の概要と養成所での学生たちの体験を項目立てて整理した。

4. 倫理的配慮

養成所 1 期生および保健婦教員の方たちに対しては、常に活動の目的と情報活用、プライバシーの保護等について説明し、協力の了解を得た。同窓会では、事前の案内文書に説明を加えて送付し、当日は、口頭説明にて了解を得た。聞き取り調査では、個別面接の場合は、文書

表 1 岐阜県における保健師養成の歴史

年 (西暦)	岐阜県内での出来事	社会の状況・保健師教育に関する出来事
昭和 16 年 (1941)		保健婦規則制定 第二次世界大戦開戦
昭和 17 年 (1942) 昭和 23 年 (1948) まで	日本赤十字社岐阜県支部斐太病院保健婦講習所が第二種保健婦講習所指定を受けた。 第 1 回卒業生 8 名。昭和 23 年まで卒業生を出した。	
昭和 20 年 (1945) 昭和 26 年 (1951) まで	岐阜県保健婦養成所 (第一種、第二種の養成) 開設。第 1 回卒業生、第一種生 18 名、第二種生 18 名。この養成所は昭和 26 年 3 月卒業を持って終了。	第二次世界大戦終戦
昭和 21 年 (1946) 昭和 23 年 (1948) まで	国立岐阜療養所看護婦のみを対象とした第二種の養成所である国立岐阜療養所附属保健婦養成所が開設。第 1 回卒業生 34 名。昭和 23 年まで卒業生を出した。	日本国憲法公布 保健婦看護婦再教育開始
昭和 24 年 (1949) 昭和 27 年 (1952) まで	岐阜県保健婦講習所 (5 ヶ月養成) が開設。第 1 回受講者 27 名。昭和 27 年 6 月をもって廃止。	保健婦学校養成所指定 規則改正 (1 年以上)
昭和 26 年 (1951)	県内での保健婦養成機関なしの時代。	保健婦学校養成所指定 規則改正 (6 ヶ月以上)
昭和 45 年 (1970) 平成 14 年 (2002) まで	岐阜県立看護専門学院が開設され保健助産学科が設けられた。入学定員 20 名。 翌 46 年には、岐阜県立衛生専門学院と名称変更。 昭和 51 年に保健助産学科が保健学科、助産学科それぞれ 1 年コースに分科。	
平成 11 年 (1999) 平成 12 年 (2000)	岐阜医療技術短期大学専攻科地域看護学専攻開設。入学定員 20 名。 岐阜県立看護大学開学。入学定員 80 名・3 年次編入学 8 名。 岐阜大学医学部看護学科開設 (平成 13 年 4 月より学生受入)。入学定員 80 名・3 年次編入学 10 名。	

を用いてあらためて目的、方法、プライバシーの保護等について説明し、協力の了解を得た。電話の場合は、電話時の説明に加え、後日文書を郵送し、協力の了解が確認できた場合にのみデータとした。

Ⅲ. 結果

1. 岐阜県における保健師養成の歴史

岐阜県における保健師の教育機関の歴史は、表1に示すとおりである。今回焦点を当てている岐阜県保健婦養成所が開設される以前にも、第二種の保健婦養成機関が2か所設けられていた。また、岐阜県保健婦養成所開設後にも2か所の養成機関が設けられた。しかし、すべての養成所が数年で保健師養成を終了しており、昭和27年～45年までは、岐阜県内で保健師養成は行われていなかった。県内での保健師養成再開は、昭和45年岐阜県立看護専門学院が開設され保健助産学科が設けられた以降である。

2. 岐阜県保健婦養成所概要と1期生の養成所での体験

1) 場所の変遷

昭和20年4月、岐阜市内の岐阜県中央保健所に併設で設置されたが、実際の入学は7月1日だった。しかし、同年7月9日の岐阜空襲により焼失し、授業は中断した。その後、加茂郡白川村（現白川町）の県民鍛錬所に移転して再開された。再開に際して、生徒たちから再開の要請をしたと述べた1期生もいた。終戦は白川村で迎えた。終戦直後も女子は危険ということで授業が中断し、一度実家に帰ったと述べている。寮生活をしていて空襲にあった1期生の体験は、岐阜空襲の記録冊子に掲載されている⁵⁾。

その後、養成所はさらに、昭和24年に白川村から稲葉郡蘇原町（現各務原市蘇原）に移転し、昭和26年3月に最後の修了生を出すまで授業が行われた。

2) 職員の状況

保健婦教員の方によると、昭和20年9月の職員は、保健婦教員2名、保健所長および県衛生課から4名、事務員2名、炊事担当1名の他、保健所や県立病院、県衛生課の職員が授業を行ったとのことである。

保健婦教員と男性教員1名は、生徒たちとともに養成所で寄宿生活をしていた。岐阜から来る講師は車で通ってきたが、時間に遅れたり来なかったりしたことも

あったという。1期生によると、保健婦教員は、母親への対応を細かく指導し、また、勉強の仕方を教えたという。先生は怖かった、厳しかったという1期生もいた。保健婦教員自身も当時22歳か23歳頃と若く、看護婦経験のある第二種生には教員より年上の生徒もいたとのことである。

3) 入学資格・修業年限・入学試験

第一種と第二種の区別があった。第一種は、入学資格が高等女学校卒業または、これと同等以上の学力を有するものであること、修業年限2年以上であった。第二種は、看護婦の資格を有するものであること、修業年限6ヶ月以上であった。

実際には、岐阜空襲、終戦などにより、授業の中断があり授業日数は短縮されている。また、すでに授業が始まった終戦前後に途中入学している人もいた。1期生の第一種生は、昭和21年7月、第二種生は、半年早く昭和21年1月に卒業している。

入学試験は、受けた、口頭試問があったと述べた1期生と、試験を受けた記憶はない村役場への申し込みだけだったのだろうかと言った1期生がいた。入学の時期・経緯がさまざまであり、状況も異なったようである。

4) 教育内容

(1) 授業科目

表2は、第二種生の方が保管していた成績証明書に記載されていた授業科目である。授業は第一種生も第二種生も一緒に受けていたが、第二種生によると、表2に示したように看護学校で学んだということで履修を免除される科目があったとのことである。さらに、第二種生の方は、第一種生は病院実習があったが、自分たちは保健所実習のみで、病院実習はなかったと述べている。

また、1期生の方たちは、異口同音に教科書はなく、すべて講義内容を筆記して自分の学習用の記録としたと話すが、教員をしていた方は、「保健婦業務という簡単な冊子のような教科書はあった。」と話された。授業や実習、修学旅行での学習体験を表3に示した。

(2) 実習

病院および保健所で実習を行っている。前述したように、病院実習は看護婦資格のない第一種生のみが受けている。病院実習は、県立病院、市民病院、大学病院の3箇所に分かれて3ヶ月程度行き、病棟をローテーショ

ンして体験したようである。病院ではいろいろ体験させてもらよかったと言う声が多かったが、実習を受け入れる病院側も保健婦とは何かが分からず、何を実習させればよいか分からなかったのではないかと語った1期生が2名いた。保健所実習は、県内の保健所に2、3人ずつ分かれていったとのことであるが、やはり、何を学ぶのか明確ではなかったようである。

(3) 修学旅行

修学旅行として語った1期生も学習として語った1期生もいたが、岡山市にあったハンセン病の療養所である邑久光明園に見学に行っている。交通事情も悪い中、苦労して電車に乗って往復したとのことである。

5) 生徒たちの生活状況

岐阜市では通学の学生と寮生がいたが、白川に移転後は近所の学生2,3名を除いて全員合宿生活であった。大広間に第一種と第二種の学生が別れて寝泊りした。暖房も無く、食料もサツマイモ1つが食事に出たこともあるほど乏しい状態であった。表4にあるとおり、食料や物が無い中での学習の様子を多くの1期生が話された。

6) 第1期生の入学経緯

表5のとおり、無医地区の保健婦となることを村長から要望された、保健婦という職業を知り自ら希望した、親に勧められた、たまたま保健婦養成所の近くに住んでいたなど、さまざまなきっかけで養成所に入学していた。養成所を知ったきっかけも、新聞に学校ができることが載った、人づてに聞いた、町や村役場で声をかけられたなどそれぞれである。

住民の健康管理を担う人材として周囲から期待されていたことを感じるエピソードとして、入学してから岐阜新聞が無医村から来た生徒の取材に来た、5,6人該当者がいたということである。

V. まとめ

1. 養成所における1期生たちの状況

・昭和20年7月に授業が始まった岐阜県保健婦養成所は、授業開始わずか1週間で岐阜空襲によって授業が中断し、校舎を移動した。さらに、終戦による授業中断もあった。特に初期の段階で授業の中断と再開が繰り返された激動の養成所生活であった。岐阜空襲を体験した寮生全員が無事であったことは幸いであった。

表2 第二種生の成績証明書に記載された授業科目一覧

科目名
○生理学及解剖学大意
○細菌学大意
○薬物及調剤大意
栄養大意及調理方法
衛生統計
国民保健大意
○看護学乃大意
助産学大意
母子衛生大意
結核予防大意
急性伝染病予防大意
慢性伝染病予防大意
衛生法規
社会保険社会事業
保健婦業務
国民体力管理
環境衛生
心理学
倫理
保健所訓練

○は第二種生履修免除科目

- ・養成所第1期生の入学のきっかけはさまざまであった。戦時下で国民の健康管理を期待されて始まった教育であったことも感じられたが、無医地区での活動や工場での健康管理など人々の健康を守ることの必要性を語った1期生もいた。
- ・学習内容として感染症についてよく学んだとあるが、結核対策や性病予防が重要視されていたその当時の状況^{6) 7)}を反映している。また、柿の葉を利用した栄養指導や野生食づくりも食糧難という当時の現状の中で住民が実施可能な方法を取り入れていったものと考えられる。他県の保健婦講習所でも、野草料理作りや豆乳作りの栄養実習をしたそうである⁸⁾。その時代の健康課題への対応、生活状況にあった保健指導の実施という、いつの時代も変わらない保健師活動のあり方を感じた。
- ・保健婦規則が作られて4年後であるが、実習施設側も1期生ということで職種の特徴も分からないまま受け入れていた様子である。しかし、病院実習では医師に質問に答えてもらった、いろいろ見せてもらったなど新しい職種に対する期待や体験させようという現場の受けとめが感じられ、1期生が誇りを持って学ぶ姿勢を後押ししたのではないかと感じた。
- ・終戦前後の困難な生活の中で、生徒たちは合宿生活を

表3 学習体験

授	業		
教科書はなかった。黒板に書いたことと先生が話したことを裏紙をとじたノートに書いた。・・・夜、寮で清書をした。手がペンドこだらけだった。			
夜は寄宿舍で何もすることないから、みんなその筆記を一生懸命整理した。あっちの隅、こっちの隅とみんなそれぞれの所で整理をした。すると途中でお腹がすいてくる。なんとなしに心が寂しくなる。みんなしょぼとなる。火鉢だけはあったので、家から送ってきた玄米を缶詰のカンカンに入れて、火鉢の中へ入れて炒ってそれをお腹に入れる。みんなお腹すいてるので、ちょっと分けて、過ごしてそれで勉強していた。			
とにかく本一冊無い。せめて看護学の本だけでも欲しいと思って、私の在所の方で10歳くらい年上の看護婦さんがあったので、看護婦の本がないか借りに行ったんです。上巻と下巻と全然違う会社のですけども、借りてきてくれて、その本で一応参考書にしたんです。後は何にも無いです。特に公衆衛生なんてなのは全然。			
時々、印刷物を配布する講師もいた。印象に残っているのは、保健所長が出したテスト問題で、結核患者の痰を食べたニワトリの卵を食べると感染するかという問題だった。結核菌は、胎盤移行しないので感染しないと学んでいたもので、そのように答えた。空気感染するもの、胎盤移行するものなど、感染症についてはよく教わった。			
母乳の飲ませ方とかは保健婦の先生。栄養学は、県の先生だったと思う。地域へ出てってもその先生を頼る事が出来た。・・・とにかく何にも無い時代。例えて言うなら乳児の湿疹、もう想像もできん湿疹が、頭いっぱいにくっくちゅくちゅに出る。栄養が行き届いていないし、不衛生。石鹼もそう無い時代だからね。先生はビタミンB1が足らんのやってしょっちゅう言われて。でもビタミンB1で何をあげたらいいかわからない。今と違って何にも無いから、柿の葉緑素というか、新芽の出た時の柿の葉っぱを乾燥させて粉にして離乳食に入れてやれとか、そういうことを教えて下さった。			
その頃食糧難で、野生食づくりをやった。山でヨモギとかイタドリ、葉とかギョウブだとか取ってきて野生食の講習会をやった。			
実	習		
県病院へ行きました。病院の先生も質問に対してすごく親切に教えて下さった。一目おいてくださった感じ。初めてだから、看護婦ではない、もうちょっと上みたいな感じに先生はとってみえたのではないかしら。・・・注射器の消毒は1回1回沸騰する所まで行って消毒。「あんたちゃんと沸騰するまでやってきたかね」で看護婦さんが言うので、「はい、やってきました。」。何故それを聞かれるかというと、空襲があると途中で電気が切れてしまう。それで「沸騰しとるのやってきたあ」で言われた。そういう時は、私たちも戸惑ってしまって、もう1回やらないといけなかなと思ってやりました。途中でなるとなんか気持ち悪いでしょう、(そういうふう)にならんようにと頑張って消毒、注射器を持って走りました。			
市民病院へ3ヶ月ぐらい実習に行った。実習では看護婦としての仕事をやらせていただいたけど、珍しい手術があると見せて下さったり、病気でかわった病気やかわったケガがあると、見せて下さったんです。あとは、あっちこっちブラブラしとっただけみたいな実習です。注射1本打たせてもらうわけじゃなし、予防、問診をやらせてもらうわけだし、そういうことは全然、当時、病院が知らないんですね、どんなことやっていいか。保健婦なるものが分からんものだから。			
半年勉強した後、実習した。岐阜大病院で3ヶ月実習し、各科を10日間ほどでまわった。手術も見せてもらった。名古屋大学では、ホルマリン漬けにされていた空襲で焼けた人の解剖を見学した。			
保健所へ行きましたが、訪問に連れてってもらえるのかなにも無くて、保健所へただ行くだけ。保健婦さんみえるんですけど、・・・あんまり外へ出ていくことも無かったと思う。結局何をやっていいかわからないと、薬剤師さんの軟膏をいろんなものと混ぜ合わせて練る、それを一生懸命やってた。・・・他の方はどうだかわかりませんが、分かれて行っている。だから保健所の印象は私はあまり良くないです。			
保健所実習が1ヶ月ぐらいありました。その当時は保健所も保健婦の仕事のしてるような形ではないので、集団健診を見せてもらいに行ったり、そしてただ役場へ見に行っただけ、やったことは。性病診療だけは、性病診療所は併設してましたから、やらされたっていうか、やらせてもらったっていうんか、それは、実際実物でできたんです。			
家庭訪問は、1回だけついて行きましたけど、その訪問が、今思うと家庭訪問ではないです。ただ知ってる家行って、笑い話して帰ってくるだけ。そこに赤ん坊はいましたけど、赤ん坊見るとか、着てるものを調べてあげるとか、そんなこと全然無い。・・・そこで家庭訪問なるものが、全然分からなくて、保健所に就職して、性病の方は様子を見てね、帰ってくる、それが家庭訪問やと思いついていたんです。家庭訪問の意味、実際が分からなくて。その後保健所を移っても分からなかった。国立公衆衛生院で行った東京での保健所実習はものすごく身になりました。その保健所では、ほんと活躍してましたから。			
修	学	旅	行
修学旅行のようなもの。光明園では、ここにとどまってもらえないか(職員になってほしい)という誘いがずいぶん言われた。しかし、病気への偏見(こわいなど)があり、残って働くことを希望したものはいなかった。食堂なども見学した。食堂に入る前に靴を消毒して入った。患者は、家族で住んでいるので学校などもあった。			
(光明園への修学旅行) 旅館もあらへんで、先生の親戚かがあったんで、京都に、そこに皆が雑魚寝して、それで食べさせてもらって、お金のことは全然覚えられないんですけど。そして岡山まで行って、岡山から船に乗って。			

表4 寮生活

階段をちょっと降りた所に教室があって、寮と建物は別だった。
大きな広間、30畳敷きぐらいの広間が3つあってそこに1種と2種に分けて部屋におって、そして、ちょっと小さい部屋を教員。・・・見晴らしのいい所で、ちょっとこざっぱりした、今で言う5階建てぐらいの高さのどこ。で、ガスも何もあらへんで、皆が焚物の束を1人が5つづつ高いところまで登ってかならん、持って。
冬場やけど誰も暖房も何もあれへんで、寒かったやろうけど、若かったで寒なかったんやろうね。今みたいなのは考えれんわ、何もあれへんでね。
金曜の晩か土曜日になるとガサガサガサガサ5時頃から廊下を走って並んで切符を買う。うちに帰るのに。並ばないと切符が買えない。・・・駅までちょっとあったから、走っていった。みんな食料を取りにうちに帰りたいから。
この大広間を・・・皆と一緒に並んでずらっと。これぐらいの幅の机があって、それが勉強机になったり食卓になったり、2つ並べて食べたの。1番思い出なのは、サツマイモが1個だけ出たときがある。サツマイモを蒸かしたやつ。それが1食分。
寮母さんのような人が二人近所の人が通っていた。食事を作ってくれていた。夜野菜を刻んでなべに入れて帰り、朝来て煮て出していた。夜の間になべにムカデが入り、食べたらムカデが入っていたことがあった。しかし、食べるものがないので、ムカデを出して食べた。自分は実家が農家なので、家からいり豆などを持っていっておやつに食べていた。家にはよく帰って食べ物をもっていった。家に食べ物がない人はそういうこともできなかった。分けてあげてはいたが。
夕方になると川伝いに田舎行って、なんでもええで(食べ物)売ってくださいって頼んだ。難儀した。
やっぱし帰っても仕事も無いし、なんとも仕方が無いし、今から工場へ入るわけにもいかんっていう気持ち。女学校っていうのは六年生で女学校に入って四年間行ったので、年齢的には若い。中学卒業したのと一緒。まだ、子供。その内に寂しいの何のってということも忘れてしまって。みんなと友達になったので、寂しいことも無しで、友達同士話したり。娯楽はあまりしなかった。卓球をやったりということは無かった。

表5 入学の経緯

学校に入れば学徒動員に行かず、家に帰ることができた。ちょうどその時、実家のある地域で保健婦がほしいということで、学校ができると聞き、ちょうどよいと思って養成所に入った。保健婦ならば勉強したことが家庭に入っても役立つだろうと思った。
戦時中のことで、戦地に行ってみたい役に立ちたいという気持ちがあり、看護で行こうと思った。保健婦がよりよいだろうと思って養成所に入った。
病院の手伝いをしていた時に、養成所に入っていた友人から誘われて入学した。終戦後に入学。
働いていた工場で事故があり嫌になって実家に帰ったとき、父親が保健婦の存在を知り、勧められた。新聞に保健婦養成所の試験を行うと出たのを見て受験した。工場の事故で健康管理に関心を持った。
看護師として勤務中に保健婦養成所ができると知り、やってみようと思った。若かったので、何でもやってみようという気持ちがあった。女学校に行っていたが空襲で寮を焼け出され、実家に戻った。遊んでいるわけにもいかず、保健婦養成所が白川口に疎開してきたと聞き、何をするとかわからないまま頼んで入学させてもらった。途中で入学。
教員養成所を受験したが、難しかったので、第2希望だった保健婦養成所を受験し合格した。
日赤の看護婦になりたかったが身長が足りずに受験できず。女学校の職員室に保健婦養成所の受験についての掲示があり、それを見て興味を持ち受験した。
村長から無医村の保健婦になってほしいと勧められた。

しながら、食料もノートや筆記用具も十分に無く、学習環境が整っていない中で、助け合いながら学習を続けていた。他県の保健婦養護訓導養成所においても、入学時期が戦争末期のため、教科書もなくひたすら先生の講義をノートにとっていたとあり⁹⁾、先生の教えを吸収するが如くひたすらに学んでいた様子が伺われる。

・入学時は戦時下、卒業時は戦後の混乱期であり、1期生の気持ちも終戦をはさんで揺れ動いたのではないかと推察される。しかし、困難な中でも1期生自身の努力と周囲からの期待により、生活の場で人々の健康を

守るという基本的な職業意識が養成所で育まれていったと考えられる。

2. 養成所が存在することの意義

・昭和27～45年までは、岐阜県内で保健師養成が実施されていなかった。養成施設が身近に存在し、養成所での同級生、先輩後輩といったつながりがあることは、異なる自治体に勤務し始めてからも情報交換をしやすくし、連帯感をもつ基礎となる。また、保健師の後輩育成への気持ちを強め、教員による卒業後の支援を可能にすると考えられる。そのような保健師たちの拠り所が長期間にわたり県内に存在しなかったことは、

その後の保健師活動の全県下での統一的な発展や地域での保健師確保に困難をもたらしたのではないかと予測される。

- ・1期生たちは、卒業後にそれぞれの職業生活に旅立っていった。卒業後の体験については、別途報告する。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、資料収集や聞き取り調査等に関して、快くご協力していただいた岐阜県保健婦養成所1期生及び養成所の元教員の皆様には、深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 松下光子他：保健師教育の教科書の文献に示された予防活動の考え方と方法，平成13-15年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究報告書；173-205，2004.
- 2) 「無医村対策」，朝日新聞，昭和19年1月19日4面
- 3) 愛媛県保健婦のあゆみ編集会：ふりかえっていま 愛媛県保健婦50年のあゆみ；110-115，1993.
- 4) 大沢一郎監修：あゆみ，日本看護協会保健婦部会岐阜県支部，1980.
- 5) 岐阜市平和資料室友の会 岐阜県歴史教育者協議会編集：岐阜も[戦場]だった 岐阜・各務原・大垣の空襲；21-22，岐阜市平和資料室友の会 岐阜県歴史教育者協議会，2005.
- 6) 井口恒男：岐阜県の公衆衛生，岐阜新聞社；2-12，2002.
- 7) 前掲3) 14-15.
- 8) 前掲3) 114.
- 9) 前掲3) 113.

(受稿日 平成18年 1月11日)

(採用日 平成18年 2月20日)